

地域づくりスタートアップ期を担う大学の役割（その2）

～東かがわ市丹生地区での実践～

長尾 敦史
原 直行

- I. はじめに
- II. プロジェクトの進め方
- III. 実践活動
- IV. まとめ

I はじめに

香川大学では、2013年度より文部科学省「地（知）の拠点整備事業（以下、COC事業）」の採択を受けて香川県内の7市町および香川県と連携し、地域の課題解決を図る取り組みをプロジェクトベースで行ってきた。プロジェクトが解決すべき課題は多種多様であり、自治体ごとに活動の範囲や領域が異なる。地域づくりと教育プログラムの2つ性格をもつ本事業について、本学では全学共通科目「瀬戸内地域活性化プロジェクト」として展開している。当該科目の全学的な位置づけや教育効果については、（鈴木ら [2018]）を参照されたい。本稿では、その中の一つのプロジェクトとして香川県東かがわ市でのプロジェクトを事例として取り上げる。本学における香川県東かがわ市での調査研究については、研究室単位や企業単位では、いくつかあったが、自治体と本格的にスタートしたのは、2013年からである。東かがわ市での活動の中心は、地域の課題を地域で解決するための協働によるまちづくりの推進であり、具体的には市内10ほどの地区を概ね旧小学校単位に分け、各地区でコミュニティ協議会（以下協議会）の立ち上げと運営を支援している。

本稿では、1地区目の東かがわ市相生地区につづき、2地区目となった東かがわ市丹生地区について2014年から2015年の2年にかけての活動報告を行い、地域づくり萌芽期における大学の役割について考察したい。

II プロジェクトの進め方

東かがわ市のプロジェクトは、アクションリサーチ（長尾ら [2018]）を用いている。教員らが地域の実情を把握し状況やタイミングを考えてアクションを起こし、変化を評価分析することで次のアクションにつなげている。

II-1 モデル地区の抽出

開始当初に取り組んだ相生地区の抽出方法（長尾 [2019]）は、以下の3点であった。

- [1] 複数自治会にまたがる地区
- [2] 教育機能のうちエリアの中の小学校が廃校になっている地区
- [3] エリアマップなどガイドマップなどの発行経験がない地区

これに加えて、4つめの要素として以下の項目を選定のポイントをした。

- [4] 郊外化が進む地区

選定ポイントの結果から、旧大内町丹生地区で活動を行うこととした。丹生地区は人口4,930人、高齢化率35.4%（2015年国勢調査）である。高齢化率は東かがわ市内で最も低い。高松市から最も近く、国道11線沿いにはロードサイド型店舗があり、東かがわ市では数少ない住宅団地がありベッタウン的な性格も持つ地区である。地域コミュニティ協議会は2014年4月に地区内にある12自治会を中心に設立された。東かがわ市から指定管理を受けて、コミュニティセンター（小学校及び幼稚園の跡地）の運営と管理を行っている。また活動の資金は、市からの地域コミュニティ活性化交付金制度によって支えられている。

Ⅲ 地域実践活動

Ⅲ-1 2014年度

(1) 地元学手法による地域資源発掘調査

地元学とは、地域の持っている力や人の力を引き出し、あるものを組み合わせて、地域づくりに役立てていくことである（吉本 [2008]）。地元学を取り入れた目的は、地域のあらゆるものを住民と香川大学の学生がともに探して、調べていく作業を通して、地域づくりについて考えていくきっかけになればという考えからである。これらは住民が地域の隠れた資源について評価することや、地域の歴史を再確認できるといった効果が期待できる。また「集落点検」「地元学」などは地域づくり初期段階において有益な取り組みである（小田切 [2018]）とされている。そこで初年度は、地域資源発掘調査からスタートした。

丹生地区は全部で13地区からなり、各地区の住民の方3～5人と大学生2～3人がグループになって2～3時間かけて各地区をまわった。調査スケジュールは以下のとおりである。

第1回	2014年6月22日	町田地区、大谷地区
第2回	2014年8月21日	馬篠地区、小磯地区、番屋地区、北山地区
第3回	2014年9月2日	小砂地区、土居地区、中山地区、三殿地区
第4回	2014年9月17日	松崎地区、落合地区
第5回	2014年10月26日	喜定地区



町田地区の中心的な通り



オケ池から金毘羅神社のある森をのぞむ

資源調査の様子を一部、抜粋して紹介する。

町田地区ではでかつての街並みの話を聞く。丹生地区の目抜き通りであった、この街並みに人通りが少なくなったことを地域住民はとても残念がっていた。小さな祠が見えるが、この地区の神社に向かう参道でもあった。三殿地区にあるオケ池周辺には神社の森があり、かつて放課後に子供たちが遊んでいたこの森には、江戸時代からの墓場、神社、寺もあり、「この世」と「あの世」の境界であった。

2014年度は、地元学による地域資源調査を中心に行った。これに基づき、地域マップの作成に入る予定であったが、課題が浮き彫りになった。それは大学生が地元学での「外の人」になりきれておらず、地域の「これまで大事にしてきたこと」（地域資源）を地元の人と対等なレベルで発掘できていないということであった。地元の人との説明を一方的に聞くことが大部分になってしまい、これでは「外の人」としての役割、すなわち外部の視点で地域資源を発掘することが果たせていない。大学生は全員1年生（2014年当時）で力不足であったことは否めず、今後、地域資源を見つめる「まなざし」についてもある程度学修する必要を感じた。

Ⅲ-2 2015年度

(1) 絹島・丸亀ジオサイト見学ツアー

丹生地区には、絹島、丸亀島に柱状節理という大きな地域資源がある。これらの資源は、海上からでしか見ることができない貴重な資源である。そこで丹生地区に住む親子を対象とした見学ツアーを企画した。2014年度に進めた資源調査では、住民でも丹生地区内の地区が違ふとよく知らないところがあり、もっとよく知りたいという意見が複数あったからでもある。何より、このような「ツアー」の実施は、地域住民自身がその地域資源に気づき、さらには住民が地域に「愛着」や「誇り」を持つようになることがねらいである。

実施日：2015年8月8日

参加者：地元住民25名（大人13名、子ども12名）、香川大学6名

内 容：丸亀柱状節理の見学、丸亀の女島、男島の砂州で海水浴、絹島柱状節理の見学



ツアー中の丸亀の砂州での海水浴の様子



CM撮影の様子

ツアーの実施を通じて今回のツアーの効果は二つあげられる。第一に、海からしか見ることのできない柱状節理の価値の確認ができたことである。地元で国の天然記念物があると知らなかったという声があり、丹生地区住民の方々の地元の資源再発見の場となった。またそこから丹生地区に住むことに対し誇りをもってもらう場になったと考えられる。第二に、参加者が海や地層に興味を持つきっかけとなったことである。これは今回のジオサイトツアーをきっかけに柱状節理をテーマとして自由研究に取り組んだ小学生が3組いた点からわかる。また、船とライフジャケットにより日常とは違う海を演出することで、興味をより強く惹くことができた。海と絹島丸亀こそが丹生地区の地域資源であるため、その良さを知り、興味を持つきっかけとなったことは、丹生地区への誇り向上に効果があると考えられる。

今回のツアーの目的であった「地域資源の伝達と再確認」を、海や自然のすごさや楽しさを伝えることで達成することができたと言える。

(2) マップ作成

マップ作成は、東かがわ市のプロジェクトでは、「暮らしのモノサシづくり」(小田切 [2014]) 中の重要な柱と位置付けている。先行して実施した相生地区での経験を活かして作成を行うこととした。ジオサイトツアー以降にマップ作成に取り掛かったがマップ作成はうまくいかず紆余曲折することとなる。構想から印刷できるまでに、約1年かかった。

・実施スケジュール (2015年度)

2015年 9月	マップ作成について議論をスタート
2015年 11月28日	マップ作成計画案の提出
2015年 12月19日	昨年度のフィールドワークの成果説明、マップ作成方法の決定
2016年 1月24日	マップ具体案提出



フィールドワーク・喜定地区



考案したマップを説明している様子

マップづくりが進まなかった背景に、丹生地区の住民の中に地域に対する諦めや地域の課題を「自分ごと」化することができなかったのではないかと仮説を立て、アンケート調査を実施することにした。

(3) アンケート調査

地域の空洞化については、人の空洞化、土地の空洞化、ムラの空洞化(小田切 [2009])に加えて「誇り」

の空洞化（小田切 [2014]）が指摘されている。そこで、誇りの部分を抽出すべくアンケートを実施した。

丹生地区活性化協議会のメンバーと丹生コミュニティセンター利用者を中心に2015年11月28日～12月19日に実施し、計28名の回答を集めた。丹生地区住民の丹生地区に対する意識調査や、丹生地区での取り組みの成果を確認することを目的としている。丹生地区住民が丹生地区に対してどのような肯定的または否定的な印象を持っているのか、そして丹生地区の問題を調査するため以下のような質問項目でアンケートを行った。また質問2～5、7は自由記述である。

- 質問1：プロフィールについて（性別・年齢・出身）
- 質問2：丹生地区の特産品・名物・名所・自慢は何か
- 質問3：丹生地区の良いところは何だと思うか
- 質問4：現在の丹生地区での生活で困っていることは何か
- 質問5：丹生地区にあってほしいものは何か
- 質問6：現在の丹生地区への満足度（10段階評価）
- 質問7：質問6の回答理由

回答者の属性については以下のとおりである。

性別：男性10名 女性18名

年齢：85歳以上2名、75～85歳8名、65～75歳15名、65歳以下2名

農作物52件	以下内訳	自然10件	以下内訳	歴史的産物4件	以下内訳
・パセリ	24名	・絹島丸亀	7名	・正真講	1名
・ブロッコリー	4名	・北山に囲まれた温暖地	1名	・石清水八幡神社	1名
・ネギ	1名	・海岸線の美しさ	2名	・庄松さんの誕生の地	1名
・イチゴ	8名			・丹生小唄	1名
・レタス	12名				
・モロヘイヤ	2名	商業施設件	以下内訳		
・米	1名	・ベッセル（温泉）	2名	※複数回答可	

図：質問2「丹生地区の特産品・名物・名所・自慢は何か」の回答結果

・人間関係（温厚で人柄が良い、近所の人とのつながりや交流がある、組織力・結束力）	15名
・自然が豊か（海、山）	7名
・災害・事故が少ない	3名
・風光明媚	2名
・住みやすい（気候が温暖、市の西端部に位置する）	6名
・開放的	1名
・絹島	1名
・ベッセル	1名
※複数回答可	

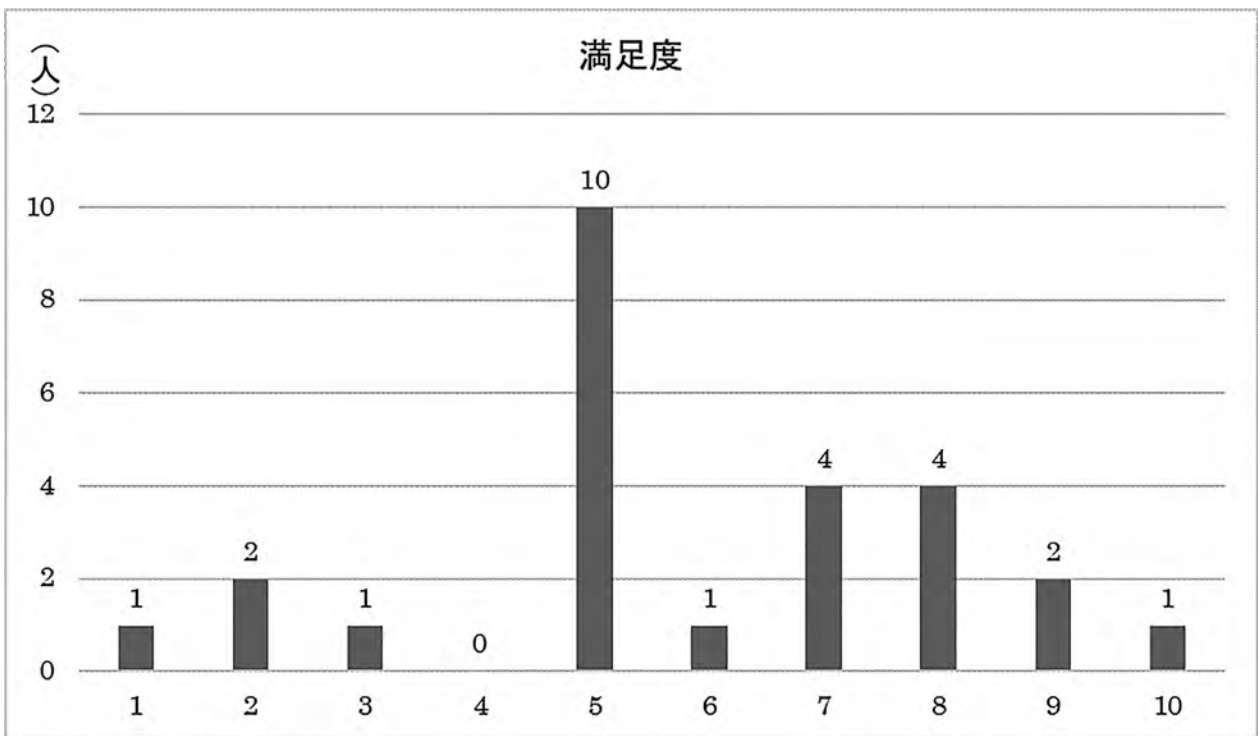
図：質問3「丹生地区の良いところは何だと思うか」の回答結果

・交通が不便（海岸線にバスがない、車がないと生活できない、公共交通機関が少ない）	13名
・少子高齢化、過疎化	3名
・学校の廃校による活気不足	1名
・役所が遠い	1名
・交通事故が多い（国道11号線と県道の交差点）	1名
・公共施設がない	1名
・買い物に行けない （今は良いが今後行けなくなりそうだ）	5名 3名
・お店がない	2名
・特になし	7名
※複数回答可	

図：質問4「現在の丹生地区での生活で困っていることは何か」の回答結果

図書館、巡回バス（5名）、デマンドタクシー、道の駅（特産物等の販売）、大手企業、交通手段、民間の店、観光地、集まれる場、憩いの場、人出、食事処 ※複数回答可

図：質問5「丹生地区にあってほしいものは何か」の回答結果



図：質問6「現在の丹生地区への満足度」の回答結果

- ・地域の連帯が強く、トラブル発生の懸念がほとんどない。(8)
 - ・住みやすく、住人が素朴なところ。(8)
 - ・若い人が少なく農業も老人ばかりでしているようで大変である。(6)
 - ・今のところ何とか生活できているし地域とのつながりもあるが年を重ねて運転もできなくなるとどんな生活になるのかは不安である。(5)
 - ・現在はあまり不自由・不便も感じずに過ごしているが、今後高齢者が進み毎日の生活に不便が生じることもあるかも、と思っている。(5)
 - ・老人夫婦、または独居老人の家庭が多く過疎化が進んでいる。(3)
 - ・何かにつけて不便である。もう少し何か活性化する方法はないか。(2)
- ※（数字は満足度）である。

図：質問7「質問6の回答理由」の回答結果

質問3では総合して住みやすいということが丹生地区の良いところであるという結果になった。住みやすさの要因として人間関係が最も回答数が多かったことは、大きな良さであるとともに、丹生地区住民が生活の中で対人関係を重視しているということがわかる。しかし質問3で人間関係が良いと回答した人の質問6での満足度の平均値は5.33で全体の平均より下回る。つまり人間関係が良いことが住民の高満足度にはつながっておらず、その他に住みやすさを含めても高い満足度にならない理由が存在することになる。

ここで質問4の回答を見ると圧倒的に交通手段の不十分さからなる不便や車社会への依存が不安要素となっている。それと関連して買い物に行けないことを問題点として5名が挙げられており、そのうち3名は現時点で問題ではなく今後問題となることを不安要素としている。そのほか通院や農作業の面を含め将来の生活に不安を持つと回答したものが6名、そのうち5名は質問6での満足度が全体の満足度の平均値を下回る。また質問3で人間関係が良いと回答した人の60%（9名/15名）が質問4・5・7で交通が不便なことを問題視していることより、交通手段の不十分さが住みやすさと高い満足度がつながらない理由であり、丹生地区の最大の弱みであると言える。

質問5の回答は様々である。ただ、全体の平均値より低い満足度の回答者は「生活用品を販売する店」や「海側を通過する巡回バス」など具体的な回答が多い傾向であるのに対し、平均値より高い満足度の回答者は、「大手企業の参入」や「新たな観光地」など非現実的な回答や「人が集まれる場」など抽象的な回答が多い傾向にある。このように回答は、「現在の生活水準の維持を目的とした回答」と「現在よりもさらなる地区の発展を目的とした回答」に分けることができ、重要視すべきは前者である。

アンケート調査を通じて丹生地区の強みは良い人間関係からなる住みやすさであり、反対に弱みは交通の不便さで、そこから生まれる将来の不安を解消することが重要であることが明らかになった。

IV まとめ

本稿では、地域づくりスタートアップ期における調査や活動について報告し、それに伴う住民に意識ついて報告した。住民による新しいコミュニティづくりは、マップ作成を通じて参加の場づくりを構築するなど、第2段階に入っている。

大学で実施する地域づくり系プロジェクトは、教育的側面と学生の視点をいかすことであり、学生が継

続的に関わりながら、地域づくりの一端を担う活動に発展している。丹生地区での活動は、2019年度で5年目に入っている。この間に丹生地区の住民を対象にした大規模なアンケートや丹生地区総合計画づくりなどを進めている。2015年度以降の取り組みについては、次回の報告としたい。

注) 本稿の記述は、丹生地区活性化協議会の運営の巧拙を示すことが目的ではない。

[参考文献]

- ・鈴木健大、原直行、古川尚幸、西成典久、山田香織（2018）「全学共通科目「瀬戸内地域活性化プロジェクト」における実践と教育効果に関する検証」『香川大学教育研究』 pp175-188
- ・吉本哲郎（2008）『地元学をはじめよう』岩波ジュニア新書
- ・小田切徳美（2009）『農産村再生』岩波ブックレット
- ・小田切徳美（2014）『農山村は消滅しない』岩波新書
- ・原直行（2016）「住民による地域づくり活動の必要要素と活動評価に関する研究」『地域活性学会2016年度研究大会論文集』
- ・原直行（2017）「住民による地域づくり活動と創発戦略」『地域活性学会2017年度研究大会論文集』
- ・長尾敦史、原直行（2018）「地域づくりと大学の役割」『地域活性学会2018大会論文集』
- ・長尾敦史（2019）「地域づくりスタートアップ期を担う大学の役割 ～東かがわ市での実践を通して～」『香川大学地域連携・生涯学習センター研究報告 第24号』 pp.55-62